

【5月の気象】

5月の季語には、「新緑」「新茶」「麦の秋」など爽やかや春を思わせる一方、「初夏」「立夏」など夏の始まりを思わせるものもあります。

この時期は季節の変わり目で気温の変化が大きい時期です。最高気温が30℃を超える日もあれば、20℃に達しない日もあります。特に、移動性高気圧に覆われて晴れた朝には、放射冷却による晩霜のおそれもありますので注意が必要です。

5月はさわやかなイメージがありますが、気温の日変化が大きいように、気象の変化も大きい時期です。低気圧が発達しながら日本海を通過することにより、広い範囲で天気が急激に変わり、暴風・しけとなり、東予東部では「やまじ風」が吹くことがあります。また、上空に冷たい空気が入ると大気の状態が不安定となり、強い雷や突風とともに“ひょう”が降ることもあります。反対に好天が続き、少雨や空気が非常に乾燥することがあります。松山では2009年5月10日に日最小相対湿度 6%を観測し、観測史上1位の記録となっています。

【気象用語】エルニーニョ現象

2026年夏は、エルニーニョ現象が発生する可能性が高まっています。春についても、平常の状態が続く可能性があるものの、エルニーニョ現象が発生する可能性の方がより高い予想です。

エルニーニョ現象とは、太平洋赤道域の日付変更線付近から南米沿岸にかけて海面水温が平年より高くなり、その状態が1年程度続く現象です。逆に、同じ海域で海面水温が平年より低い状態が続く現象はラニーニャ現象と呼ばれ、それぞれ数年おきに発生します。エルニーニョ現象やラニーニャ現象は、日本を含め世界各地の天候に大きな影響を及ぼします。気象庁では、エルニーニョ監視海域の監視指数（海面水温の基準値との差）の5か月移動平均値が“6か月以上続けて”+0.5℃以上となった場合を「エルニーニョ現象」、-0.5℃以下となった場合を「ラニーニャ現象」と定義しています。

エルニーニョ現象が発生している時には、東風が平常時よりも弱くなり、西部に溜まっていた暖かい海水が東方へ広がるとともに、東部では冷たい水の湧き上がりが弱まっています(図1)。このため、太平洋赤道域の中部から東部では、海面水温が平常時よりも高くなっています。エルニーニョ現象発生時は、積乱雲が盛んに発生する海域が平常時より東へ移ります。エルニーニョ現象発生時の夏(6~8月)の天候の特徴は、西日本については気温が低い傾向、降水量は多い傾向があります。

エルニーニョ監視速報(図2)によると、今年の夏は平常の状態が続く可能性(30%)がある一方で、エルニーニョ現象が発生する可能性(70%)の方がより高くなると予想されています。

季節予報(暖候期予報、3か月予報)でも、エルニーニョ現象が発生する可能性に言及していますが、偏西風は日本付近ではやや北を流れる予想で、太平洋高気圧の本州付近への張り出しはやや強い見込みです。近年は地球温暖化の影響等により地球全体で大気全体の温度が高い状態であり、偏西風の流れなども総合的に判断して、暖候期予報では気温は平年より高い予報としています。

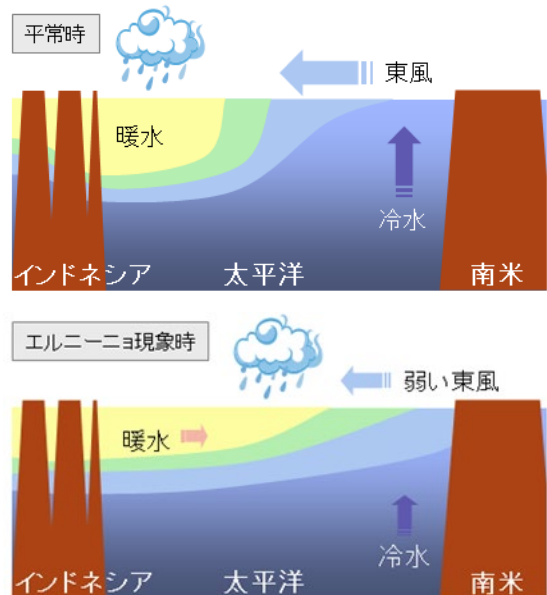


図1 エルニーニョ現象に伴う太平洋熱帯域の大気と海洋の変動模式図

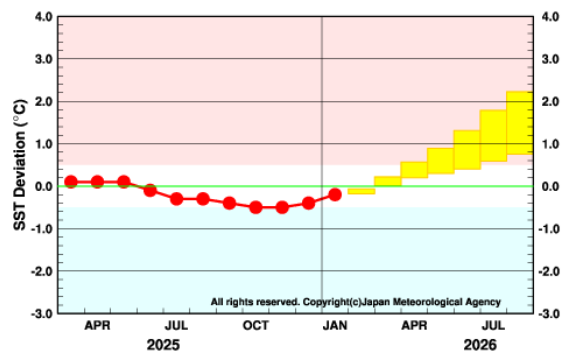


図2 エルニーニョ監視指数の経過と予測

令和8年4月10日発表「エルニーニョ監視速報 NO.403」
エルニーニョ監視海域の監視指数(海面水温の基準値との差)の5か月移動平均値が+0.5℃以上の範囲に入り、6か月以上持続した場合に、エルニーニョ現象の発生となる。